
仮面使いの恋

うに。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面使いの恋

【Nコード】

N2950L

【作者名】

うに。

【あらすじ】

ペルソナ3の女主角の話。

順平とのコミュがあるくせに片思いのまんま終わっちゃうのが、なんだそれ、すごくオイシイじゃないか！と、マイナーなのを覚悟の順平 女主角な、お話です。

あとネタバレについては一切遠慮してません。時系列はわりとアバウトです。前後してる場合は生暖かい目で見守るか、指摘してください。さすれば直します。

完全なる自己満足なので、話がボンボン飛びます。書きたい場面を

書きたいだけ書き散らします。

春 プロローグ（前書き）

主人公のデフォ名は神谷詩音^{かみやしおん}です。

春 プロローグ

笑顔が似合うと、よく言われた。

そう言われるたび、それは違うんだ、と叫んで、泣き喚きたかった。何故ならそれは、全部嘘だから。

弱虫で、泣き虫で、臆病な自分を隠したかったから、無理につけていた、仮面だったんだ。

「詩音！」

ゆかりの声が後ろからした。

振り返ると、うれしそうな笑顔でこちらを見ていた。

「ゆかり！おはよー！」

「おはよ！電車、一緒だったんだね！」

「そうみたい。全然気づかなかった。」

わたしも。とゆかりも笑った。

それから、一時限目はなんだっけとか、放課後一緒に帰ろうかとか、そういう取り留めのない話をしていく。

「お、詩音っちにゆかりっちジャン！おっはよー！」

「げ、順平。」

ゆかりが後ろを振り返って嫌そうな顔をした。

「げ、つてなんだ！ひでーなあ！」

順平が頬を膨らませた。私はその様子を見て笑った。

「あはは。おはよ、順平。」

「おう！」

順平が笑った。

彼の笑顔が好きだ。

私みたいに裏表を感じさせず、そして。

そこから先は胸に閉まっておく。

大丈夫。だいじょうぶ。

春 はがくれにて。

同じクラスの順平に、ラーメン屋に連れられた。スープはとろっとろのすごい濃厚で、麺はあつらえたみたいのスープに良く合っていた。

「おいしい！」

「だつろー？」

順平が嬉しそうに笑って、自分も麺をすすった。

「すごい……。何はいつてるんだろ……。」

昔の血が騒ぐというヤツだ。

「ぜってえ教えてくんないんだよ、ここの店長。」

「これで商売してるからね。」

厨房のおじさんがにやにやと楽しそうに笑った。

「むう……。昔探求してただけに気になる……。」

「ふは、おま、ラーメン巡りでもしてたのか？」

「ううん。作る方。」

「まじ!？」

ぎよつ、と順平が目を丸くした。

「太るからすぐやめたけど。作ったぶん、食べなきゃだから。」

私がそういうと、順平は「確かに。」と言って表情を崩した。

一ヶ月で キロ……。体重計が信じられなくなったあの日……。

落とすの、しんどかったなあ……。

「じゃーさー、今度、機会があつたら俺に食わせてくれよ！」

「おっけい!ほった落ちちゃうくらいのは作ってあげるから!」

「お、言うねえ!」

ずず、と麺をまたすすった。

……。これを超えるなんて、できるのだからか。

……。

「・・・で、店長、これ、何が入ってるんですか？」
「セコッ！」

春 はがくれにて。(後書き)

今さらですけど、一話一話が超短いです。

プロローグも文字制限に引っかかって、後半足しちゃったくらいには短いです。

ちなみにこの話は時系列的にプロローグより前。

夏 八つ当たり（前書き）

夏が早いw

というのは、本人も思っています。

チドリに夢中な頃の順平と、めっちゃ悲しい感じの詩音ちゃんのお話。

夏 八つ当たり

「聞いてくれよ、この間チドリがさー!」「チドリってばぁ・・・」
「チドリ」「チドリ」「チドリ」「チドリ」「チドリ」「チドリ」

うっぜえw

ゲーセンのクレーンゲームでとったフロスト人形を壁にたたきつける。

とりあえず今日は迷わずタルタロスだ、風花にも言ったし、思いっきりシャドウを叩きのめそう。

「・・・」

フロスト人形を拾い上げる。

ついた汚れを手で叩いた。・・・ごめん。

八つ当たりってというのは、分かってる。

分かってる。

いい加減、あきらめれば、いいのに。

あきらめ、きれない。

目の奥がジンとして、あわてて首をぶんぶんと振った。

泣かない。

私は、泣かない。泣かない。泣かない。

小さい頃からの自己暗示だ。

泣かない。泣いたら、心配される。迷惑がられる。同情される。

そんなの、いやだ。

だから、笑うのだ。

私は、笑う。笑う。笑う、笑え。

「・・・はは、」

酷く滑稽だと思った。

なんだ、一個も変わってねえじゃんか、私。

本当の笑顔が、浮かべられるようになるって、思ってた。順平がいたら。

なのに、結局はまた、暗示に頼るんだ。

悔しくて、泣こうと思ったけど、涙はとうに引っ込んでしまって、私はまたから笑いをした。

いつそ、当たって砕けたら、楽なのに。

そんな勇気も、私には無い。

臆病者め、大嫌いだ、おまえなんか。

夏 八つ当たり（後書き）

この頃の順平はひたすらうごい。

夏？ 同属（前書き）

ついに荒垣先輩が登場ですよ！！いえい！（）

あと自分、こんな話書いておきながら女主人公は7月上旬までしかしてないので、がきさんとのコミュはかなりうすいです。

よづつべさんのところまでうっすら観たくらいです。

夏？ 同属

「先輩、ご飯食べに行きましょっか？」

荒垣先輩は一瞬だけ戸惑った顔をした後、表情を少しだけ緩めて笑った。

良かった。断られるんじゃないかと思っていたから、一安心だ。荒垣先輩を誘ったのには、勿論理由がある。

自分と、おなじにおいがしたから。

この人は自分の死を恐ろしく思っていない。いや、たぶん、恐ろしくはあるのだろうけど、享受している。

死んでも、仕方ない。そういう感じ。

、、、、

私は少し違って、本当は十年前、死んでいたから。

だから、この命は私にとってはおまけのようなものだ。

ほんとうは、死んでいたから。

だから、なにも、望むべきじゃなかったんだよね……、順平。

「……どうした？」

「う！？あ、す、すみません。ちょっとぼーっとしてました！どこ行きます？」

「そっだな……。」

放っておけない。この人はたぶん、死のうとしているから。

(わたし、は、それは、とてもいや、だ。)

夏？ 同属（後書き）

詩音が言ってるのは、十年前の事故のことですね。

私の勝手な設定です。

死にかけだった時にデスを封印されて、その影響で治癒力が上がったとか、そういう適当な設定です。

主人公はそれをうつすらおぼえてるっていう。

夏 同属？2（前書き）

荒垣視点。

夏 同属？2

「先輩」「せーんばい！」「あ、先輩！」「荒垣先輩ってば！」

最近、よく神谷と一緒にいることが増えた、と思う。

今も晩飯に連れ出されて、はがくれで肩を並べてラーメンを食べているし。

・・・にしても、女って、こういうカロリーの高いもんって気にするもんじゃないだろうか。しょっちゅう食いに来てるみたいだけど。

「大丈夫！部活とか、タルタロスでたっぷり運動してますもん！」
俺の視線に気づいて、神谷が胸を張った。

「・・・その油断が・・・」

「・・・、何です？」

神谷の声が若干低くなったので、目を逸らす。

その様子に神谷がおかしそうに笑った。

「あはは。でも、ほんとに大丈夫ですよ。やっぱ、先頭切って戦ってるぶん、運動量がすごいらしくて。むしろ食べなきゃすぐ倒れちゃいますし。」

あと、私、学校でも生徒会に、部活に、委員会に、あ、この間、フアッション同好会にも入りました！」

「・・・働きすぎじゃねえか？」

「そうですね？疲れるけど、楽しいことの方が多いから・・・、あんまり分かんないです。」

美鶴もこいつに生徒会まで押し付けるなんて、大方、口裏合わせのできるヤツが欲しかったんだろうけど・・・。

「私、学校じゃ人気者なので。あはは、なんちゃって。」

冗談、という感じで神谷が言ったが、恐らくその通りだろう。

活発で、人当たりが良くて、誰にでも懐いて。

でも、それは多分、^(セモ)仮面だ。

なんだろう、同属、というヤツだろうか。なんとなく、わかる。こいつからは、常日頃から薄く伸ばしたような、「死」のにおいがある。

死を、受け入れている、かお仮面。

天田の顔がよぎった。

何が同属だ、一緒にしてやるな。だって、俺は

・・・、

それでも、なんでだろうな。

放っておけねえ。こいつには多分、「生」が見えていないから。

(俺、は、それはとてもいやだとおもつ。)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2950/>

仮面使いの恋

2010年10月11日13時28分発行